



する」ことを目指し始まった欧州統  
イラスト・よしおか じゅんいち

げるべき歐洲的なるものが多様性だ。テロ問題があり、東方への拡大が現実となる中で、今日のEUは次第に排外的側面を深めつつある。ここをどう乗り越えるか。いかにして、多様な人々を幅広く抱擁し続けていくことができるか。戦争を知らない若き欧州人たちが増えていく中で、大戦封印に代わる統合欧洲の次の課題がそこにある。

# この一冊

（カ・二、三〇〇円）

・ゆういち 71年  
北海道大学大学院  
科専任講師などを  
入学法医学部専任講  
に「戦後国際秩序  
へ外交」『外交に  
など』

## 「と苦悩描く

なアウトサイダーがそこにどのような適応また不適応に苦悩したのかという、社会史的視点である。同時にこのような癖の強い人物を使い切るイギリス外務省の懐の深さも指摘されており、イギリスの組織文化を理解する上でも興味深い。

評者もヨーロッパの外交史を研究しているが、極めて乱暴にいえば、英独仏の外交はそれぞれ違った色彩をもっており、それを醸し出しているのが外交を担う人物である。強烈な個性とそれによる外交活動が興味をそそるのである。この意味でこの本は、イギリス外交の色彩を描き出したものとして、その叙述というと、条文外交の細かな分析があるが、全編を貫く「城ともいえるイギリス考案された最善の方法」だからである。

《評》 東京大学教授 高橋 進

2005年7月17日 日本経済新聞

## 文庫・新書

■『国際離婚』松尾寿子著  
自らフランス人男性との離婚  
経験を持ち、インターネット  
上で国際離婚を語りあう会  
を運営する著者が、日本人同士  
より格段に難しい、外国人

国際離婚

松尾寿子

### 生々しい事例を紹介

との離婚の実態に迫る。法律が十分に把握できない海外で、配偶者に子供を奪われる、家庭内暴力の加害者に仕立て上げられる、など生々しい事例が紹介される。法律婚の不自由さを嫌って、あえて事実婚の形をとる国際結婚が増えたといった、ごく最近の傾向にも触れている。（集英社新書・六八〇円）

■『水族館の通になる』中村 元著 ■『東京の戦争』吉村昭著

水族館副館長を務めた多くの戦史、歴史小説で知られる著者が、様々な素朴な疑問にQ&A形式で答えてくれる。ピラニアの水槽の掃除は危険？死んだ魚は食べてしまう？など。頑強に見えるサメは、地上では自重で内蔵を傷めるほど輸送に手間かかる軟弱な魚なのなどという。魚や水族館についての先入観を気持ちよく吹き飛ばしてくれる。（祥伝社新書・七五〇円）

外交のあり方を考えるために、外交関係者ばかりではなく、広く読まれてもらいたい本である。というの叙述とすると、条文外交の細かな分析があるが、全編を貫く「城ともいえるイギリス考案された最善の方法」だからである。

に亘る直ぐれたニシノロヒにまう。雪国で見る野生動物の足跡は必ず曲がっている。ネズミカウサギがあのよう真づぐな足跡を残すのは、捕食者に追われているときだけだ。そこで言語学者が問う。だったら、あの人達を追いかけているのは何だろう。経済成長の強迫観念、トランミーに現実主義の立場から構想することのできる条件が、ようやくできただのではあるまい。

（経済学者）

## 経済

お断り 読書面の書籍の価格は税抜きで表記しています。